

野洲図書館 事業評価シート【令和5年度（2023年度）】

I 市民の必要とする資料と情報の提供				
市民一人一人の知りたいこと、学びたいことに対して適切な資料を提供することは、憲法等に定められている学習権を保障する非常に重要な社会的機能です。また読書という営みには、新たな知見を得るという事のみならず、人や社会への理解を深め、心を豊かにするなど計り知れない価値があります。 野洲図書館は、市民が読みたい本を提供する、市民が知りたい情報を得られるという図書館の基本的機能の質を向上させ、またその件数を増加させるよう努めます。				
◆活動の方針				
- 蔵書の魅力を向上させるため、選書の質・本の見せ方・求める資料へのアクセスのしやすさを工夫します - レファレンスサービスのPR及び回答の質の向上に努めます - 普段図書館を利用しない人へ来館を促すPRを行います - 積極的に特集展示を実施し、様々な分野の本へのアクセスを促します				
令和5年度取組み実績				
大規模書店店頭での直接選書や書店開催のブックフェアに参加することにより、より幅の広いジャンルや情報を得にくい中小出版社による出版物にまで資料収集の範囲を広げることができた。レファレンスサービスについては情報探索スキル・トークスキルの向上を目指し職員研修を実施した。レファレンスのPRは十分行えなかった。非来館者に向けては、駅の予約本受取ボックス利用のPRにより、一定の新規登録・再登録があった。館内では棚での表紙見せや特集展示を期間を空けることなく実施し、利用者が普段手に取りにくい資料へアクセスする機会を提供した。				
成果指標と目標				
指標名	R5目標	R5実績	達成率	R6目標
個人貸出し冊数（野洲市民）	470,000	445,917	94.9%	430,000
実利用者数（野洲市民）	9,000	8,627	95.9%	8,250
レファレンス件数	5,500	5,719	104.0%	5,000
レファレンス満足度(%)	95	99	104.2%	95
自己評価				C
レファレンス業務に関してはおおむね目標を達成できた。コロナが5類に移行し個人貸出しが前年より増加することを期待したが、結果前年度の数値を下回ることとなった。				
今後の課題		令和6年度の活動方針		
- 新鮮な資料・情報を提供するための十分な資料費の確保 - 図書館サービスのPR		図書館サービスのPRを積極的に行い、市民の来館を促す 特集展示を継続して実施し、本との出会いの機会を増やす 限られた資料費の中で、最大限に魅力的な資料の収集に努める		
図書館協議会評価				B
- 数多くの特集展示やレファレンスの高満足度、予約本受取ボックスの盛況、アル・プラザ野洲での移動図書館など資料提供に向けた取り組みが評価できる。 - 一方で、図書館に来館していない方へのPRにもう少し工夫が必要だと感じる。特集展示やイベント、レファレンスの例などの照会を、広報や図書館だより、コミセンや駅のポスターなどを利用して周知してほしい				
A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標をあまり達成できなかった D：目標を全く達成できなかった				

図書館協議会委員の意見等

(評価する点)

小さな特集展示が常にある、立ち止まって見る人が必ずいる。興味関心を広げ、読書への入り口を広くしていることを実感できる。

駅のボックスについて、アンケートで多くの評価があったとおり、図書館利用者が確実に増えている。

様々なテーマで途切れなく資料展示を行い、いろいろな関心を持つ市民の興味に対応しようとしている点が良いと思います。

レファレンスの満足度が非常に高い点。利用者に即して丁寧に調査を行っているのだと思います。

レファレンス件数増加と満足度が達成できている

団体との連携や自治会との共催など業務量増大の中の実施を高く評価する。

人員を含め限られた資源の中で、特殊コーナーや開架の工夫、各種イベント、移動図書館など市民に本を届けようという意志が感じられ、それが新規登録者数増や貸出冊数減少の歯止めとなっていると感じます。市民の貸出人数は+0.8%と増加しています。

個人貸出冊数は前年度より減ったものの、誰でも広く図書館が利用できるようにと、駅の予約本受取BOX等の取組やPR、積極的な特集展示など多くの工夫や努力が効果を成していると感じる。

個人貸出し冊数、実利用者数は前年度より減少しているが、達成率をみると活動目標に沿った取組の努力が見られ評価できる。

特集展示が頻繁という印象を受けた。

活動方針の1～4は、概ね積極的に取り組まれています。特に、レファレンスサービスや特集展示などは野洲図書館としての特徴もかなり出ています。

ただし、その努力と貸出し冊数の増加が連動していないところに、今の時代の図書館課題があるように思います。更に、そこを深掘りしていく取り組みを期待しております。

(課題と考える点)

レファレンスに関するアンケートを拝見し、気付いたが、利用者は司書と書籍整理スタッフの区別がつかないため、後者のスタッフに情報を求め、うまく対応してもらえないことがあるのではないかと。(私自身もそういった経験がある。)そういった方の、レファレンスに関する評価が低いのではないかと。

資料展に関しては、来館すれば目につきますが、来館しない方に今何の展示があるのか、どんな資料が展示されているのか知らせるアピールに欠けているように思えます。HPの固定されたボタンを押さないとわからないので、そこに気づかない方にはアピールしづらい。「お知らせ・イベント」欄で案内して、その本文中に展示資料一覧へのリンクをつけるなど、動的なアピールができるのではないのでしょうか。(また、展示紹介ページからの資料一覧へのリンクもダイレクトに資料一覧へ行かないので、「図書館おすすめ」の分野選択の画面でとまどわれるかもしれません。)

もしテーマについて長期的な予定があらかじめ設定されているなら、市広報や図書館だよりで予告記事を載せることもできると思います。

レファレンスに関して、利用される方の満足度は高いが、未使用の方・知らない方の割合がかなりあり、サービスの周知や利用への誘いの工夫が必要と考えます。(知っていても利用しない人は、自分はそんな"高度な"調べものはしていないと思っているかもしれません。例えばレファレンス事例をHPや図書館だよりに掲載して、「こういう身近なことについてでも利用されています」的な紹介をすれば、自分も使ってみようと思われるかもしれません。)

資料費の確保と外部に向けた広報の拡大

予約本受取ボックスの待ちが発生している件は、利用者のニーズではないか？貸出ボックス増設ではない対応を検討する必要がある。

「駅の予約本受取ボックス利用のPRにより、一定の新規登録・再登録があった」と書いていただいているということは、逆に潜在的に利用したいと思っている人に、まだ本が届けられていないようにも思えます。自動車による移動図書館、地域コミセンへの予約本受取ボックスの設置なども継続して考えていってほしい。

特集展示やイベントPRがもっと必要だと思います。人の集まるスペースへの掲示、SNSの利用も検討してみしてほしい。

年齢別で、0～6歳の貸出しはそれほど落ち込んでいないが、その親の世代の30代、40代の利用が大きく減っている。特集コーナーの内容をもう少しこの世代の女性に絞ったものにしてみてはどうでしょうか。

子育て世代は忙しいのかもしれないが、子どもを図書館に引きつける中で、子どもと一緒に保護者が足を運ぶ機会を生かして、魅力的な本との出会いができればと思う。

今後、資料費の減額の影響で、購入冊数の減少により本への興味が薄れる心配がある。

上記（評価する点）に類似していますが、活動方針1～4の積極的な取り組みは、最低限の必須なこととして、更なる丁寧さを加えながら、継続的な取り組みをお願い致します。それで、ある程度のリピーターの確保にはつながると思います。図書館に足が向いてくれない方への対策は、また別な角度、別な取り組みが必要かと思いますが、そこが掘り下げられることを期待しております。

野洲図書館 事業評価シート【令和5年度（2023年度）】

2 こども、若者と本をつなぐ

乳幼児期から児童期にかけては、本と接することにより、ことば（語彙）を獲得し、考え、判断し、行動するための基礎的な力だけでなく、豊かな感受性・心を育むことができる、きわめて重要な時期です。ヤングアダルト（YA）になるとより高度な知見や文脈を読み取るようになり、本を通して自らの社会を広げ、社会へはばたくための力を養います。この時期に読書をしたという経験は、やがて歳を重ねたときに本を読むための素地となります。

◆活動の方針

- 1 読書の魅力・楽しさを最大限PRします
- 2 「良書より適書を」を基本に、一人一人が必要としている本を提供します
- 3 ひとりひとりの成長の度合いに合わせて「次の読書」へステップアップできるよう工夫します
- 4 園や学校と連携し、より豊かな読書環境を提供できるよう支援します

令和5年度取組み実績

読書の楽しさを感じてもらうために、市内小学校全クラスでブックトーク・お話を会を実施した。「としょかんBOX」の運用により、常に子供たちの身近に魅力のある本がある環境を提供することができた。図書館の日常の選書も、子どもに人気のある本と子どもに読んでもらいたい良書をバランスよく購入することを心がけ、幅広いジャンルから本を選べる環境づくりを行った。先生の希望に応え、調べ学習のための資料の提供を実施した。学校図書館支援員を介して、より密な学校連携を行うことができた。

成果指標と目標

指標名	R5目標	R5実績	達成率	R6目標
（市民）児童書貸出冊数	160,000	153,254	95.8%	146,000
年齢別実利用者数（7-12歳）	1,300	1,202	92.5%	1,200
年齢別実利用者数（13-18歳）	580	514	88.6%	550
年齢別貸出冊数（13-18歳）	18,000	15,947	88.6%	16,500

自己評価

B

学校や園への本のボックスの巡回貸出しの実施や、学校でのブックトーク・おはなし会の実施、調べ学習への資料協力などにより、子どもの身近に本がある環境は醸成されてきていると考えるが、一方で来館利用が伸び悩んでいる。野洲図書館は子どもだけでは来館が難しい立地にあるため、「大人が連れてくる」という利用形態に依存しなければならないところが課題である。

今後の課題

- ・子どもの身近な場所に本との接点を確保する（幼保、学校、学童などとの連携）
- ・ヤングアダルト世代の利用を増やす
- ・子どもの来館を促す施策の検討

令和6年度の活動方針

- 学校・園との連携の維持・強化
- ヤングアダルト向け新規事業の実施

図書館協議会評価

- ・学校・園と連携した取り組み（図書館BOX、ブックトーク、お話し会、移動図書館等）は大きな効果があり、今後も継続してもらいたい。学校図書館支援員のサポートもとても良い。学校図書館支援員の配置は、学校図書館の重要性を認識してもらえたという意味で効果的だった。
- ・現状の取り組みを費用含めて継続しながら、子育て世代の来館促進の方策を、大変だが検討して欲しい。
- ・スマホで読む文字量はかなり多い。若者の読書の定義の再考が必要かも。

B

図書館協議会委員の意見等

(評価する点)

利用者の来館を待つだけでなく、スタッフがどんどん出向くことで、本に親しむ機会を提供できている。

昨年度は特に学校図書館支援員を配置して学校との連携をより密に行ったことで、学校現場に学校図書館の有用性、学校図書館に"人"がいることの必要性、を認識してもらえたのではないかと思います。

学校連携が定着しつつあることは評価できる

子供のいる場所に本がある「としょかんBOX」の運用が市内中学校でも順調である点、学校図書館支援員の新設により学校図書館のベース作りに寄与している点を評価する。

こちらに限られた資源の中でブックトークやお話会、選書などの活動により子どもと本をつなげる活動を行っていただいている。また、学校図書館支援員の活動もとても有効だと考える。ただし、本来の図書館司書を早期に置くべきだと考える。

学校園と連携した取組(図書館BOX、ブックトークやお話会、移動図書館等)は大きな効果があり、今後も継続してもらいたい。また学校図書館支援員のサポートが大変よい。学校司書モデル校に配置されている司書さんが学校と連携して取組む様々な活動は子どもの主体的な読書活動や学習活動にいい影響を与え、子どもと本、子どもと図書館をつなぐ役割を果たしている。市内全体にこの効果を広げていくことが必要。

小中学校への図書館BOX運用は読書教育推進において非常に効果的であり評価できる。

活動方針の1～4は、概ね積極的に取り組まれています。特に、「園」や「学校」との連携には野洲図書館として特徴が出ていると思います。

ただし、その努力と貸し出し冊数の増加が連動していないところに、今の時代の図書館課題があるように思います。特に児童の数が相対的に減っている中での取り組みの深堀りは難しさがあるかと思いますが、もう一步踏み込める取り組みを期待しております。

(課題と考える点)

ヤングアダルトが求める、落ち着いて自習できるスペース、就職・資格試験に関する資料が十分でなく、特に大学生の利用は少ないのではないかと。大学生は大学図書館も利用するが、居住地の図書館も利用したがつている。

自己評価に「大人が連れてくる」という形態に依存しなければならないところが課題」とありますが、それは所与の条件なので、課題としては子育て世代(子どもを連れてくる親世代)に来館をどう促すか、という事になるかと思います。親世代の関心に沿う催しや、図書館資料の広報などが考えられますが、市や子育て支援主管課の広報物で子どもと一緒に出かけできる施設として紹介してもらうなど、子どもを連れて行ける施設であることをより広く知ってもらうことも大事かと思います。(「子連れで行って子どもが騒いだらいけない」という図書館のイメージをお持ちの方もまだいらっしゃるかも。)

時間がなく来館しづらいYA世代はなおさらですが、「こども、若者と本をつなぐ」という場合には学校との連携(学校(図書館)を通じたサービス、学校へ出向くサービス)のウェイトが大きくなると思います。もしこの考えが妥当ならば、指標がこれでよいのかどうかの検討も必要になると思います。

子どもとヤングアダルトの来館促進は一考の余地がある

立地や開館時間にしばられない子供・若者向けのサービスの創設が必要ではないかと思う。

児童書の貸出しは、各年齢層とも減っている。学習コーナーに来ている子供たちも増えているが、本の貸出しにはつながっていないのではないかと。学習コーナーに来たついでに図書館に入りたいと思わせる取り組みが必要ではないか。

「化石とあそぼう」「調べものマスター」は、親世代にもっとPRするとよいように思います。図書館に来ていない親でも、子供の勉強には力を入れていると思います。

今後のとしょかんBOXの本の入れかえの費用がないと聞いた。費用の捻出が必要か。

読書の定義は「本を読むこと」であるが、漢字の「書」には「かきしるしたもの」という意味もあり、ウェブ上の文章を読むことも「読書」といえなくもない。スマホヘビーユーザーが読んでいる活字量は多く、若者の読書の定義は検討を要するかもしれない。

年寄りだけでなく子供の来館を促す方を試行すべき

上記（評価する点）に類似していますが、活動方針1～4の積極的な取り組みは、最低限の必須なこととして、更なる丁寧さを加えながら、継続的な取り組みをお願い致します。それで、ある程度のリピーターの確保にはつながると思います。図書館に足が向いてくれない方への対策（特に児童への対策は難しいものがあるかと思いますが）は、また別な角度、別な取り組みが必要かと思いますが、そこが掘り下げられることを期待しております。

野洲図書館 事業評価シート【令和5年度（2023年度）】

3	誰もが利用できる図書館サービス			
公共図書館は、市民の誰もが利用できる施設であるべきですが、様々な理由により図書館を使いづらい人もいます。野洲図書館では主に障がいのある方を中心にしたバリアフリーサービスや、日本語を母語としない方への多文化サービスなどをすすめてきました。しかしその他の要因、例えば、図書館まで遠い、車の免許がない、休日でも図書館利用が難しいなど、来館しての図書館利用が難しいと感じている方も多いということがわかっています。そこで、誰もが利用できる図書館サービスのあり方について、検討を進めていきたいと考えています。				
◆活動の方針				
1 郵送貸出や宅配の周知と利用の拡大をすすめます 2 大活字本やLLブック、多言語の資料の収集をすすめます 3 非来館型のサービスについて検討をすすめます				
令和5年度取組み実績				
野洲駅に予約本受取ボックスを設置（延べ4562人、13,113冊貸出し）とアル・プラザ野洲での移動図書館事業の開始（延べ246人、1,003冊貸出し）。郵送宅配サービスの利用は微減。大活字本受入れ（66冊）、外国語資料受入れ（66冊）、吉川自治会（吉川憩いの会）への出張貸出実施。小中学校向け移動図書館は3校に実施。				
成果指標と目標				
指標名	R5目標	R5実績	達成率	R6目標
郵送貸出、宅配の実利用者数	20	19	95.0%	20
野洲駅予約本受取ボックス貸出者数	4,500	4,562	-	4,500
（学校対象以外）出張貸出貸出数	300	1036	-	1100
自己評価				B
予約本受取ボックスは順調に稼働している。業務量が想定していたより大きいことが課題ではあるので工夫していきたい。アルプラザでの移動図書館も、固定の利用者層が生まれつつある。新規利用の開拓が課題。夏休みや春休みなどの長期休みの時にセントラルコートでイベント的に実施するなどの工夫をしていきたい。郵送宅配サービスは、既存利用者はコンスタントに活用しているが、まだまだ一般への認知が低いいためよりPRが必要。バリアフリーサービス対応の資料・外国語資料の受入れも進めているが、購入予算の確保が課題。				
今後の課題		令和6年度の活動方針		
・ 予約本受取ボックスの効率的な運用 ・ 地域での移動図書館の実現可能性の検討 ・ バリアフリーサービスの利用者の開拓		・ 予約本受取ボックスの円滑な運用 ・ アル・プラザ野洲での利用促進 ・ バリアフリーサービスの啓発 ・ 野洲市国際協会との連携		
図書館協議会評価				B
・ 予約本受取りボックスやアル・プラザ野洲での移動図書館など「誰もが利用できる図書館サービス」を指標とし、その実現を目指して取り組んでいることはとても評価できる。 ・ バリアフリーサービスや多言語サービスは、関係所管との連携も必要である。息切れしないよう、予算措置と職員体制の維持を視野に入れつつ、息の長い取り組みが必要である。 ・ 移動難民の交通手段の確保による来館促進を関係所管と検討いただきたい。 ・ その他、非来館型のサービスを進めてもらいたい。				
A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標をあまり達成できなかった D：目標を全く達成できなかった				
図書館協議会委員の意見等				

(評価する点)

アルプラという野洲市民にとっては極めて馴染みのある場所に図書館が入り込み、図書館の硬いイメージが軽減されたのではないかと。「気軽に利用できる場所なんだよ」というメッセージを発信できた。

アルプラザでの移動図書館の開始は全域サービス拡大への一つとしてだけでなく、商業施設との連携という意味で、県内の嚆矢だと思います。受け取りBOXと同様、県内での新たなサービスの形を開拓されていることが評価できると思います。

予約受けとりボックスと移動図書館は非来館型サービスとしてポテンシャルが高く期待できる

貸出冊数こそ目標に届かなかったものの、貸出サービスを支える各層別への取組が実施されており、24時間予約本を受取りできる駅ロッカーの設置やアルプラザ野洲での移動図書館の実施など、開館時間や立地をフォローする取組を特に評価する。

駅の予約本受取ボックス、アルプラザの移動図書館は、時空間を超えたどこでもいつでも図書館への取り組みとして大いに評価できると思います。

誰もが利用できる図書サービスにむけた様々なアイデアや挑戦が、人にやさしく温かいまちづくりにつながるより取組と思う。未就園児にむけた「ブックスタート事業」はすべての赤ちゃんに絵本をプレゼントする取組であるし、とてもよい。

この活動目標を評価視点としていることに評価します。

活動方針の1～3は、概ね積極的に取り組まれています。

ただし、もう少し、福祉サイド(ご本人様の声も含めて)との懇談・連携が必要かと思います。図書館からのやり方や発信方法が一方向的になっていないかの検証が常に必要です。双方向のやり取り、連携ができてこそその取り組みだと思います。

(課題と考える点)

外国人の在住者が多いけれども、英字新聞がないのは情報提供不足ではないか。

知的障害のある子どもたちは、学校という環境では本を手に取りよく親しむことができる。しかし、「図書館は静かにしていないといけなから行けない」という保護者の声が多く、図書館利用には至りにくい。学校と図書館が連携し、知的障害のある子どもの図書館利用を検討していきたい。

今後、超高齢社会で交通弱者も増えるであろう中で、全域サービスの重みは増してくると思います。いろいろな試みを始められるとき、それを支える職員体制をしっかりと確保していただきたいと思います。

バリアフリーサービスや外国語(特に非英語)利用者への多言語サービス(多文化サービス)は、資料提供もサービスや資料の広報も所管課や団体との連携が必須。多言語サービスの広報はシートに書かれているように国際協会との連携が有効かと思います。バリアフリーサービスについては市の福祉所管課との連携になるでしょうか。提供は一館では対応が難しい場合、県立図書館の資料の利用や市町間の連携も視野に入れたらよいかと思います。

外国語資料やバリアフリーサービスの検討が必要

実利用者率(17%)からすると圧倒的に利用していない人が多いため、従来実施していないような方法などにより図書館サービスについて認知度自体を上げ、利用につながるPRが必要と考える。

バリアフリーサービスの利用者の開拓の令和6年の活動方針が、啓発に終わっている。具体的に何をするのかをそろそろ明記するべき。一年はすぐ終わります。

アルプラザの移動図書館の日程が昨年そのまま放置されている。8/18とあったので行こうかと思ったが、今年の8/18は日曜日です。

来たくてもなかなか来られないシルバーさんはシャトルバス利用などができるとよいかもしれない。

幅広いすてきなサービスが野洲図書館さんはたくさんされているが、キャパオーバーしないか少し心配ではある。

アルプラザ以外の移動図書館事業や吉川自治会だけでなく出張貸し出しも拡大できればよい。

昔からの課題である交通手段の確保をもっと真剣に考えるべき。外へうって出るようでは限界がある

上記（評価する点）に類似していますが、活動方針1～3の積極的な取り組みは、最低限の必須なこととして、更なる丁寧さを加えながら、継続的な取り組みをお願い致します。ただし、図書館からのやり方や発信方法が一方向的になっていないかの検証が常に必要です。双方向のやり取り、連携ができてこそその取り組みだと思います。図書館に足が向いてくれない方への対策（難しいものがあるかと思いますが）は、また別な角度、別な取り組みが必要かと思いますが、そこが掘り下げられることを期待しております。